
東方七賢人～the hoi hepta sohoi～

鹿頭溪秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方七賢人 the hoi hepta so hoi

【Nコード】

N0514BA

【作者名】

鹿頭溪秋

【あらすじ】

英国を根城にする妖怪の探偵。数百年振りに帰ってきた腹黒魔法使い。等、個性的な面子が織り成すオムニバス（予定）。基本コメディ風味。バトルは熱く厨二的。時々シリアスに……。そんな感じで繰り広げられる東方projectの二次創作です。オリキャラ多数登場、キャラ崩壊気味につき、苦手な人は注意！

プロローグ（前書き）

導入部分。

因みに作者はゆかりんが大好きです。

プロローグ

—— 英国 倫敦 ロンドン × × × 公園

「……コイツは酷い」

薄暗い雑木林の中、一人の男が腕を組んでいた。

既に日は沈みかけで辺りに人気は無く、動くものはこの男だけである。

男は暫く林の中を眺めた後、ジャケットから煙草を取り出す。

「全く……。何をどうすればこんなことになるのやら」

男はそうひとりごとちると、深く溜め息を吐いた。

男の目の前に広がるのは蹂躪された林の姿。圧倒的な破壊の痕。

木々は薙ぎ倒され、切り刻まれ、炭化し、原型を留めている物は殆ど残っていない。

仮に局地的にハリケーンが発生したとしてもこうはならない。

……ここだけで戦争が起こったのなら話は別だろうが。

「ハア……。ん、ライターは何処だったか」

「マッチで良ければどうぞ」

「お、すまないね」

ありがたい。と、差し出されたマッチを受け取りくわえた煙草に火をつける。

ふと、ついさっきまで自分以外の気配を全く感じなかった事に気づき、顔をあげる。

そこには少女の上半身が浮いていた。

厳密に言えば“在る”と、いった方が良いかもしれない。

腰から下は空間に生じた裂け目の様なモノの中にあるようで、一見すると虚空から上半身が生えているかのようだ。

美麗なブロンドの髪をふわりと靡かせ、優雅に微笑むその様は、女神と表現しても差し支えない。突如として出現した少女は、男にそう思わせる様な、所謂“妖艶さ”を身に纏っていた。

男は一瞬、硬直したものの、状況进行分析、把握する事を最優先として、即座に思考を切り換えた。

見極めるべきは彼女がこちらに対して害意を持っているか否か。人間で無いのは纏う妖気をみれば明らか。幸いにも会話する意思はあるようだが……。

仮に戦闘になった場合こちらに勝算はあるか。

NO。おそらく彼女の能力は空間に関係するもの。奇襲出来ない事も無いが失敗した場合のリスクが大きい。

そもそも相手の正体が判らない以上は下手に手出しは出来ない。

(ならば話を引き延ばして情報を引き出すのが最善か)

男はそう結論づけ、単刀直入に切り出した。

「君は何者だ？」

「ふふ、少なくとも人間には見えないわよねえ？」

「……質問を変えよう。俺に何のようだ」

「手伝いに来た……と言えば分かるかしら？ ……妖怪の探偵さん？」

少女の言葉に男は更に警戒を強める。

確かに自分は探偵だ。その筋ではそこそ有名だし名を知られていたとしてもそこに疑問はない。

そして彼女は自分を知った上で声を掛けた。

普段ならば兎も角、今はタイミングが良すぎる。

「あらいやだ。女の子をそんな怖い眼で睨むもんじゃないわ。ゆかりん怖い」

険しくなる男の眼にも動じず、少女は空間の裂け目から扇を取り出すと、口元で開き目を細めた。

——胡散臭い。

男の少女に対する印象はこの一言に尽きる。

仕草がいちいち態とらしい上に、表情が全く読めない。

表情が読めない相手というのは非常に厄介だ。油断すると直ぐに相手のペースに乗せられ劣勢に追い込まれる。

(ん……？ 胡散臭い……だと……？)

男の脳内で「胡散臭い」と言う言葉が引っ掛かった。キーワード

改めて、目の前の存在を観察してみる。

中世の貴族を思わせる紫色のドレス。頭にはドアノブカバーのような帽子をかぶり、口元で扇をひるげ、にやにやしている。

男は頭を抱えなくなるのをこらえ、確認をとる。

「……アンタが八雲紫か？」やくもゆかり

「ご名答。彼から聞いていたのかしら？」

良くできました。と言わんばかりに、少女——八雲紫はぱちんと扇を閉じ、笑みを浮かべた。

「ああ、以前幻想郷について聞いた時にな。『紫色のドレスを来た若づくりの胡散臭い美人が空中に現れたらソイツは間違いなく八雲紫だ』……と」

どうやら間違い無いようだな。と頷く。

先程までの警戒は全て杞憂に終わったのだ。

男は吸い込んだ煙と共に溜め息を吐く。

脱力する男を横目に、紫は少し拗ねた様に鼻を鳴らす。

「また自分の事を棚に上げて……。アイツだって十分胡散臭いじゃない……。大体私だって——」

本人的には“胡散臭い”呼ばわりは不満らしい。

先程までの雰囲気はどこへやら。紫の愚痴により場の空気が一気に弛緩する。

「——大体いつの間にか私が胡散臭いっていうイメージが定着してるけど好きでそうしてる訳じゃ無いのよ？ そりゃあ、まあ、最初はナメられない様に態とそう見せてたけどそれでも人間も妖怪も私を胡散臭い胡散臭いって……。白の奴以前会ったとき何て言っただと思う？ 『胡散臭さが板について来たな』よ？」

「お、おう……」

男はかろうじて反応を返す。

印象が変わりすぎだ。と男は思った。

男の反応も意に介さず、紫は堰が切れたように愚痴り続ける。

「……ふう。こんなに喋ったのは久々ね」

結局、一通り言いたいことを言ってしまった紫は、憑き物取れたかの様な表情で伸びをする。

対照的に男の方は少々げっそりとしているが彼女が気にする様子はない。

頬を緩め、穏和な微笑みを携えた紫（それでもやはり少し胡散臭いと男は思った）は、ずるりと地に降り立ち優雅な動作で男へと歩み寄る。

「——改めて、自己紹介といきましょうか。私は八雲紫。幻想郷の管理者をやらせて戴いておりますわ」

「ウォーカー探偵事務所所長のジム・ウォーカーだ。協力に感謝する」

ジムが差し出した手を薄く笑いながら握り返す紫。

（こうしていれば良い女なんだが……。やはり胡散臭い）

内心、本人が聞いたら速攻で消されそうな言葉を呟いたジムであった。

「それにしても貴方、私を見ても全く驚かなかったわね」

紫^{ゆかり}が少し不思議そうに尋ねる。

確かに気付いたら目の前に少女の上半身が浮いているなんて事態はそうそう起こるものではない。

この彼女独特の登場で、人妖問わず脅かしてきた彼女としてもジムの反応は珍しかったようだ。

……尤もその登場方法が彼女が“胡散臭い”と言われる原因の一つだったりするのだが。

「いや、十分驚いていたさ。仕事柄感情をあまり表に出さなくてね。……それに――」

「それに？」

ジムの顔に思わず苦い笑いが浮かぶ。

「奴に付き合っていたら世の中の大抵の事じゃ驚けなくなる」

「……それもそうね」

思い当たるふしがあるのか遠い目をする紫。

それに苦笑を深くしつつも、ジムは黙ってグラスを傾けた。

――『Bar Faust』

市街地から少し外れた場所にひっそりと営業しているジム行きつ

けのバーである。

内装はひと昔前のもの。時代に置き去りにされたかのような雰囲気
の店内には、ジム達の他に二、三人の客が静かにのんでいるだけ
で、レコードから流れるジャズの音が響いている。

ジムと紫は、雑木林で一仕事終えた後、一杯やりに来ていた。

「……紫と白は^{あひ}どういう間柄なんだ？ 結構親しいみたいだが」

ふと、思い出したかの様にジムが呟く。

思えばあの腹黒魔法使いからは手伝いが来るであろう事は聞いて
いたが、それが誰かは全く教えられていなかった。

その事が原因で要らない警戒をしてしまったのだ。文句の一つで
も言いたくなるとジムは思う。

尤も、あの人を食ったような男は飄々と、『聞かれなかったから
答えなかった。情報の大切さは身を持って知っていた筈だろ？』な
どと宣い^{のたま}そうではあるが。

「ん」。強いて言うなら“戦友”かしらねえ……。私が背中預け
られる数少ない存在な訳だし？」

ジムの質問に対し、紫は少し悩んだ後、白との関係をそう結論づ
けた。

その言葉を聞き、ジムは紫の評価を大幅に上方修正する。

戦友。つまり彼女は、あの規格外と同等の戦闘能力を有している
事になる。

ジムは先程のやり取りを思い出し、嫌な汗が背中を流れるのを感じ
る。自分の能力ならば逃げ切れない事も無かっただろうが、紫の
話を聞く限りこちらの行動パターンは押さえられていたらしい。

ジムとしても、妖怪の群れを一瞬で殲滅してしまうような規格外と同等の力を持つであろう存在と真正面からやりあわなくて済んで助かったというものだ。

そんなジムの様子に気付いたのか、紫はクスリと微笑む。つられたように、ガラスの氷がカラリと揺れた。

「やーねえ。私自身にそこまでの戦闘能力はないわよ。能力抜きなら貴方でも勝てるわ」

「そこまで強力な能力なのか」

ジムが感心したように唸る。強い能力はその力に比例するように制御の難度が上がるのだ。

「私の能力は【境界を操る程度の能力】よ。この力を使いこなせるようになってから負けた事は殆んど無いわ」

「……反則的だな」

ジムは思わず口元が引き吊るのを感じた。自分は神にも匹敵する能力の持ち主と相対していたのだ。少なくとも絶対敵に回したくないとも思った。

「貴方も何か能力を持っているのかしら」

ジムがまたしても冷や汗をかいていると、紫が何気無しに質問する。

ジムは一瞬思案した後、口を開いた。

「加速能力——幻想郷風に言うなら【加速する程度の能力】か。」

結構応用が利くんだが……気を抜くと音速越えるからなあ」

下手すりゃ自滅だ。と、ぼやく。

「まあまあ。今日は飲みましょう？ 私カクテルってあまり飲んだこと無いのだけど、結構いけるものねえ」

「……大概にしとけよ？ まあ俺も明日はオフだ。精々付き合わせて貰うさ」

「良いわねえ。ノリの良い男は好きよ？」

互いに破顔し、乾杯する。

彼らの明るさとは対照的に、夜の闇は一層深みを増していくのだった。

プロローグ（後書き）

二人は英語で喋ってます。

ゆかりんなら英語ぐらい出来ると予想。

ジムは数少ない常識人。本編に再登場するのは大分先になります。

次回は一応の主人公であるところの奴が登場。

第一話「マヨヒガにて」

——幻想郷の何処か マヨヒガ

長い廊下を一人の女が歩いていく。

ふさふさとした丸本の尻尾を揺らしながら、客人が休んでいる部屋へと向かう。

（全く紫様^{ゆかり}にも困ったものだ）

自分の主人のあまりの自由奔放さに溜め息が漏れる。

数日前、突然紫がスキマで何処かへ行ったかと思うとボロボロの青年を連れて帰ってきたのだ。

連れてくるだけならまだ良い。問題は自分に青年の世話を丸投げした事だ。

只でさえ彼女に任された仕事で忙しいのに、死にかけた男など一体どうしろと言うのか。

しかし不幸中の幸いとも言えるのか、その青年は人間では無かった。

特に何もしくとも勝手に怪我が治っていくのである。

尋常ならぬ再生能力に吸血鬼かとも思ったが、日光に当たっていたような気もするのでおそらく違うのだろう。

真祖という線も考えられるが、それならそもそもこんな事態にはなるまい。

結局彼がどんな存在なのかは分からないままだったが、特に害も無く、実質世話も必要無かったので、彼女としても毎日様子をみるだけであり、内心ホッとしていた。

そうして女は、今日も怪我の状態を看るべく青年が寝ている部屋へとやって来たのだった。

改めて青年を観察してみる。

ボサボサの黒髪に生きているのか不安になるような青白い肌。顔の造形はまあ、整っている方で、見る者によって好みが別れるだろう。

何より目がいくのが右肩から下がスッパリと無くなっている事だ。右腕が消失しているためなのか、何ともアンバランスで、見るものを不安にさせるようだ。

この男の回復力なら生えてきてもおかしくはないように思えるが、この腕だけは一向に治る素振りを見せない。

（結局この男は誰なんだ？ 紫様は何故かはぐらかしてくるし。『そっちの方が面白いから』って……。面白いのは貴女だけでしょうに……。……ん？）

一瞬だが、男の眉が動いたような気がした。
怪訝に思った女は、青年の顔を覗き込む。

瞬間、世界が凍った。

「——ッ!？」

女の身体が硬直する。彼女の眼球から僅か数ミリのところで青年の指が停止していた。

ついさっきまで閉じていた筈の青年の両目は気だるげに開かれていて、逃げ出すことすらも許されないと錯覚するような鋭い殺気を放っていた。

動けない。

女は絶句する。相手は手負い。しかも数日前まで意識が戻らない程の重傷を負っていた相手だ。

だと言っのに――。

（私は今間違はなく死んでいた……！？）

纏わり付く濃密な死の感覚。

心臓を驚掴みにされたかのようなそのプレッシャーに、女はただ畏縮することしかできなかった。

「……おい九尾」

「――ひ」

声が出なかった。否、出せなかった。

絶対的な上位者を前にして身も心も竦み上がってしまった。青年の漆黒の瞳が此方を観る。

その絶対的な黒に考える事すら放棄してしまいそうになって――
|。

「……この気配。お前ゆかりんの式か？」

「……………へ？」

女が咄嗟に口から絞り出せたのは、間抜けな疑問符だけだった。

「……つまり、貴方は紫様の古い友人だと？」

先程とはうって変わって惚けた様な雰囲気の中、二人は茶を飲みながら話し込んでいた。

と言つても、女は手元の茶碗に手を着けていない。

青年が静かに茶を啜る音だけが座敷に響いている。

「ああ。……全く、ゆかりんも人が悪い。まさか何も話してないとはな」

クツクツと、青年が楽しげに喉を鳴らす。女は悪巧みが似合いそうな笑いだと思つた。

「まあ……何時もの事ですから」

「“何時もの事”ねえ……。苦労してるみたいだな」

「人事みたいに言わないで下さい」

「人事だからな」

いつそ清々しいくらいの笑顔で言い切る青年。

（やはり、似ている……）

女はまるで自分の主人を相手にしているかの様に感じた。掴み所の無い雰囲気がつくりなのだ。本人達に聞いたら全否定しそうではあるが。

「そういえば自己紹介がまだだったなあ。私は八十八騎白とじろき しろという」
「……！ これは失礼致しました。私としたことが名も名乗らず……！」

女は恐縮して頭を下げる。

「私は紫様の式、八雲藍やくもらんと申します。どうかお見知りおきを」
「宜しく頼むよ。——いやあ、さっきは殺しかけて済まなかった」

白は軽く頭を下げ、快活に笑う。

藍は笑い事ではないと思ったが、また殺されかけては堪らないので黙っていた。

「早速で悪いが、現在の幻想郷についての説明を」

「は、はい。主な勢力は博麗神社、紅魔館、白玉楼、妖怪の山になりますね。紫様の計画では、近々異変を起こさせて妖怪と人間のパワーバランスを調整するようです」

「他は分かるが、紅魔館とは？」

「ええ、最近幻想入りした西洋館です。妖怪の山の麓に建っている、真つ赤な外見をしているので直ぐに判るか」と

「……ふむ。因みに誰が住んでいるんだ？」

「確か……レミリア・スカーレットという吸血鬼だったかと」

「スカーレット……だと？」

「はい。どうかされましたか？」

藍が吸血鬼の名を口にした時、白の目に剣呑な光が宿った。残っていた茶を一気に飲み干し立ち上がる。

「悪いが用事ができた。挨拶も兼ねてちょいと行ってくる」

「え？ あ、あの、八十八騎殿！？」

藍の制止も意に介さず、白は好戦的な笑みを浮かべ立ち上がる。

「白、ちょっと待ちなさい」

「紫様！？」

「珍しいな。ゆかりんが一人で起きるとは」

襖を開け、出掛けようとした白に声をかけたのは紫だった。

「私だつてたまには、ね。……白こそ珍しいじゃない？ そんなにやる気を出した貴方は初めて見たわ」

人が変わったような白の様子に紫は思わず眉をひそめた。

彼女の知る八十八騎白と言う人物は、能力の高さとは裏腹に怠けぐせがあり、自分から動く事は稀なのだ。

彼が真面目に動くのは、身内の危機か、他人をからかう時だけだった筈だ。

紫の疑惑のこもった視線を受け、白は少し困った様に頬を掻く。

「いやあ、何度か殺りあつた相手の娘の顔を見て置きたくてね。別に何かするつもりは無いさ」

様子を見に行くだけだよ。と白は嘯く。藍に悪役の様だと評された笑みをたたえて。

「……わかつてると思うけど、貴方には中立を貫き通して貰うわよ」
「バランスが崩れるんだろう？ 解ってるよ」

「……そう、なら良いわ。定期的に連絡いれるのよ」

「了解。じゃ、行ってくる」
「いつてらっしゃい」

ひらひらと手を振り見送る紫に、白は軽く腕を挙げ応える。
その後、白が何か呟くと、足下に淡い光の魔方陣が浮かび、彼は二人の前から掻き消えた。

「相変わらず術式に無駄が無いわねえ」

紫は白が立ち去る際に行使した魔法について思うところがあるようだ。

「行かせても良かったのでしょうか」

先程からイマイチ状況について行けていない藍が、何処と無く呟く。

「ん？ 白の事なら心配要らないわ。あれでも幻想郷「こゝろ」の事は随分気に掛けているようだし」

ふわあ、と、紫は欠伸を殺しながら答える。

「そうではなく、あの怪我で紅魔館などに行ったら……」
「ああ、それなら余計心配要らないわ」

一度言葉を切って、紫は彼女としては珍しく、胡散臭さを感じさせない快活な笑顔で、誇らしげに口を開いた。

「彼は私の友人よ？」
「……はあ」

「何よ、その反応は」

隣で何やら騒ぎ始めた主人を尻目に茶を啜る。どうやらすっかり冷めてしまった様だ。

「紫様」

「何よ」

どうやら自分の反応が気に入らないらしいと藍は内心、苦笑した。

「後で八十八騎殿の事を聞かせて貰いますよ」

どうやら主人に一矢報いる事が出来そうだとほくそ笑む藍であった。

第一話「マヨヒガにて」(後書き)

次回、ちょっとした戦闘あり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0514ba/>

東方七賢人～the hoi hepta sohoi～

2012年1月8日01時52分発行